カルテの向こうに

Tokunaga Susumu

徳永 進

新潮文庫

カルテの向こうに

新潮文庫　と-11-1

平成八年六月一日発行

著者　徳永進（とくながすすむ）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Susumu Tokunaga 1992　Printed in Japan

新潮文庫

カルテの向こうに

徳永　進著

新潮社版

5717

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1 光(みつ)じいさんの立場 11
2 恐喝(きょうかつ)するおじ、無抵抗なおじ 16
3 死んでもええぞ 21
4 臆病(おくびょう)でいて欲しかった 26
5 空や空気や光のぜいたく 31
6 何もするな、放(ほ)っとけば死ぬから 37
7 バクチですられて、それから眠れん 42
8 手のひらに載った脳 47
9 かいま見た死後の世界 52
10 天国行きのバスに乗りたい 57
11 ディズニーランドに行くぞ 62
12 手を抜いたらいけんで、先生 68
13 いくらひゃくだって人間です！ 73
14 ところで、わしの病名は？ 78

15 医者の顔を立ててくれ 84
16 健脚じっさんの贈り物 89
17 こんなに暴れた患者、初めてだ 94
18 せん、せん、手術はせんぞ 100
19 鹿野街道の馬田鉄平先生 105
20 わしもうれしゅうござんす 110
21 和尚に説教してやった 115
22 「エデンの東」の和服のママ 120
23 おーい、磯めしだぞォ 125
24 林のばあさんの回診 131
25 ジンジャエールを三回言うと 136
26 死線を乗り越え、自転車に乗る 141
27 青空市場の六平さん 146
28 なんぼになっても悩みが湧いて 152

29 黒の背広に庖丁が光る 157
30 男ちゅうもんは、つーよいもんと…… 162
31 まだ人生、始めてないもん 168
32 ふるさと 173
33 俺たち、おやじを許していない 178
34 かんごふさーん、かんごふさーん 184
35 スートシネルノヲ、オタノミシマス 189
36 ええ噺だ、一杯飲みとうなる 194
37 りせばあさん、九十二歳の帰還 200
38 ドライブ、行こ、行こ 205
39 浮気はダメ、でも主人を見直した 210
40 クリアがえろうなる理由 216
41 ようこそ、ようこそ、さても、さても 222
42 悪い男にだまされないこと、それだけよ 227

43 敬礼！　敬礼！　233
44 指切り　238
45 「スカンポ」のおばさんの昔話　244
46 わし、死にませんから　249
47 あっ、飛行機雲だ　254
48 花咲かば　告げんといいし山里の　259
49 ホスピスからの患者さん　265
50 あやちゃん、お帰り　271
あとがき　276
医者という商売　なだいなだ

カルテの向こうに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　光じいさんの立場

気管支ファイバー検査のための局所麻酔をしただけなのに、光じいさんは叫び声をあげる。「殺せえ、さあ殺せえ、そんなに痛めるなら、さっさと殺せえ！」

大きな声に驚いて、レントゲン技師が顔をのぞかせる。「これが終わったら、タバコ吸ってもいいですから」とこどもをなだめるように言うと、「いらんわい、そんなもん。家にいんだら（帰ったら）、何本でも吸ったる」と、怒りが鎮まらない。

何とか説得して透視台に横にし、ファイバーでのぞいた。右の主気管支に癌の浸潤があった。光じいさんは肺癌だった。骨シンチでみると、既に骨にも広く転移していた。

入院し、少し落ち着いたころ、病室で、「ここ、これ治らんか」と左足をさすりながら、じいさんが尋ねた。「難しい」と答えると、いまにも泣きそうな顔をして、

「お医者さんが、そんなふうに言ったらいけませんがなあ。よーしまかせとけ、治る治るって言ってござれにゃ。わしの立場ちゅうもんがありません」

鸚鵡がえしに、「よーしまかせとけ、治る治る」と言うと、「そうそう、その調子で」と言って笑う。

じいさんは一日四〇本のヘビースモーカーだ。そして朝からのコップ酒。「完全なアル中です」と娘さんが言う。家の者も、じいさんには手を焼いてきた。「先生、タバコ、吸ったらいけんか。酒、一杯、飲んだらいけんか」と回診のたびにねだるように言う。家族と病棟のスタッフで話し合い、タバコを吸うことを認め、寝る前の塩酸モルヒネを半合の酒といっしょに飲んでもらうことにした。家の人が一升びんを持ってきた。じいさんの好きなのは、二級酒だった。京都・伏見の「都正宗」。

じいさんは、おいしそうにタバコを吸い、そしておいしそうに二級酒を飲んだ。ターミナル・ケアとして、まずまずの出発だった。でもしばらくすると、「もう一本吸ったらいけんか、もう一杯飲ませてもらえんか」と言ったり、「あの患者にも一杯やってもらえんか」などと言うようになった。アル中独特の人のよさだったのだろう。「だめ」と強く叱ったりした。

八月の朝、二病棟で処置をしているとポケットベルが鳴った。呼んでいるのは六病棟だった。

「先生、吉田光さん、朝から例のものを要求されます。どういたしましょう」と婦長さんの

少し責めるような声がした。その朝は、忙しかった。「あとで行きます」と答えて電話を切り、もうひとりの患者の処置へと向かった。処置が終わる直前に、ポケットベルがまた鳴った。婦長さんの高い声が電話のむこうでした。

「吉田さんのことです。早うびん持って来いって怒鳴っておられます。病棟中に響く大声で。他の患者さんたちも廊下に出てきたりして、大変です。すぐに来てくださいませんか！」

ぼくは、「行きます」と答えて電話を切った。そしてエレベーターに乗った。

――はてさて、どうしよう。どうして朝から飲みたくなったのだ。いやいや、それがアル中というものなのだ。じいさん、進行癌じゃないか、末期じゃないか。もう、何をしてあげられるわけでもない。二級酒が一番よく効いたではないか。だったら仕方ない、朝からでもいい、酒を許可するしかない、それしかないじゃないか――

エレベーターの中でひとりブツブツ言ってみた。エレベーターを降りて、大部屋の一七号室へ急ぎ、光じいさんのベッドサイドに立った。

「あのびん、あのびんだ。あのびん持ってこいって言ったら、持ってこい！」

じいさんは大声で怒鳴っていた。顔がひきつっている。怒鳴られている看護婦さんの顔もひきつっていた。

「持ってきて」とぼくは言う。「いいんですか、朝から」と看護婦さん。「いいから、持ってきて」

ぼくはオーバーテーブルに一升びんをドンと置いた。
「飲んだらいい、飲みたいだけ。でもね、どうして朝からいいのかって言うとね、おじいさんが、もうそんなに長くは生きられないから、だからなの」
言ってから「しまった」と思った。でも、もう遅かった。言われたじいさんは、どんなにか動転するだろうと思った。じいさんは目をすえてこう言った。
「わかっとります。知っとります、そんなことは」
そして続けた。
「でも、違うです。びんが違うです。わしが言っとるびん、これじゃあござんせん」
「えっ」と言って、それからすぐ「牛乳かァ？」と看護婦さんが尋ねた。「違うです。きのうの晩にあずけたびんです」と、じいさんは睨(にら)みつけるように言う。看護婦さんは、もうひとつの冷蔵庫に走った。そして、息をはずませて戻ってきた。「これですか、このびんですか」「そうです、これです。このびんです」。びんは小さな『オロナミンCドリンク』だった。
「なんだ、酒じゃなかったんか」と、体から力が抜けていくのをぼくは感じた。「なんぼわしでも、朝からはいりません」と、じいさんはオロナミンCのフタをあけ、ひと口飲み、ひきつった顔をゆるめた。肩の力を落として、光じいさんは涙をふいた。
ぼくの働いている病院は鳥取市の一般病院だから、いろんな患者さんが雑居している。ア

ルコール依存症の人たちも入院してくる。病院の前になぜだか酒屋があって、そこでは立ち飲みもできる。「飲んだろっ」とアル中の患者さんに問うと、「飲んでない、絶対」と答える。そして酒くさい鼾をかいて眠ったりする。時には、パジャマのポケットにワンカップがしのばせてあったりする。そんなわけで、アル中の人たちは、病院のスタッフから信用されにくい。彼らはいつも酒ばかり求める、とつい思ってしまう。そういう先入観がぼくらの中にできている。

光じいさんが求めたびんは、『オロナミンCドリンク』だったのに、それを『酒』に変えた力はいったい何だったのだろうと思う。

「結局、帰るんでしょ、三代寺に」とじいさんはぼくの顔を見つめて言った。ぼくは頷いた。三代寺はじいさんの生まれ故郷の地名である。

それから一カ月が経って、じいさんの病気は進み、食べることも、タバコを吸うことも、そして飲むこともできず、寝たきりになった。「こぼれる、こぼれる」と叫び声を出し、タバコの灰がこぼれる仕草や、盃の酒がこぼれる仕草をじいさんはする。おばあさんが、「よしよし」と言ってそれを受けるマネをすると、じいさんは安心して、また眠る。

じいさんのタバコと酒は、いつの間にか、譫妄の中へと移っていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com